

一力



工から農へ、32歳にして新規就農
新たな暮らしを求め、家族そろってUターン。

菅原 潤一さん一家

菅原潤一さん一家は、この春苦小牧市から妹背牛町へ移住し農業の道を歩み出しました。そしてこの秋、初めての収穫期を迎えました。

ご主人の潤一さんは、苦小牧市の自動車製造工場で、検品業務にあたっていました。厳しい品質基準を満たすため、常に神経を集中して検査にあたる日々。やがて「巨大な組織の中で自分はその一部分、狭い検査室でこのまま人生を送るのはどうなのか？」と疑問を抱き、いっしょに青空の下で体を動かし、仕事の成果を実感できる農業の道を考えるようになりました。

「今は元氣な父母も、やがて高齢化に伴い農業を続けられない時がやってくる。子どもがまだ小学校低学年のこの時期がライフスタイルを変えるチャンス」と、夫婦で1年間話し合った結果、ふるさと妹背牛町へのUターンを決めました。



すがわら じゅんいち

● 1986年妹背牛町生まれ。滝川工業高校卒業後2005年トヨタ自動車北海道工場に就職。今年春ふるさとへ帰郷し、農業の道を歩む。「先輩達がここまで育てあげてきた、妹背牛米の品質を落とさないよう堅実な営農を目指してゆきたい」

潤一さんは、工業から農業へと思いついた転職。32歳にして新規就農者となり、春の田植えから秋の稲刈りまでの農作業が一巡しました。

「今は父の教えを受けながらの農業者1年生。作業の手順を覚えるのに必死でした」
十数年ぶりに戻ったふるさとには、農業を営む同級生が何人かおり、「困ったとき、農業についてアドバイスをもらえることが心強い」と語ります。



さわやかな秋の風をうけながら家族サイクリング

カソカ・イナカ

どっこのここで生きている。

都市部への一極集中により、地方の市町村ではどこも過疎化・高齢化が進んでいます。妹背牛町でも、労働力の中心となる若い世代の都市流出が著しく、かつて9千人を超えた人口が近年は3分の1に。ご多分に漏れず過疎化・高齢化が悩みの種となっています。

そんな中、あえてこの小さなまちで大きな希望をもって生きていこうとする若者たちがいます。ここでは「カソカ・イナカ」を逆にとり、まちの明日を担う若者たちの姿をレポートします。



由美さん

由美さんは、苦小牧で潤一さんと結婚。実家が農家だったので、憧れていたサラリーマン家庭に満足していません。そんなある日、潤一さんからの思いもかけない提案に、当初戸惑いもありましたが、会社組織の中で決められたルールを歩むよりも、自由な農業に夢を抱くようになり、妹背牛町への移住を決めました。

「苦小牧市に比べてのんびりゆったりした環境が気に入っています。子どもの親や農家の奥さんなど同じ環境の仲間とのつながりもできました。私達のような家族が移り住みややすい住宅環境があれば、もっと若い人たちも増えるのに残念ですね」

移住先の住宅がなかなか見つからず、義父が探してくれた空き家をリフォームして、この春ようやく転居

することができました。新たな若い家族を受け入れるためにも、住環境の整備は妹背牛町の重要な課題です。



琥太郎くん

琥太郎君は新しい友達もでき、楽しく学校に通っています。友達に誘われて獅子舞をはじめ、秋祭りの神輿渡御では見事な舞を披露しました。

苦手だった自転車も、車の少ない農道で練習を重ね、ひとりで乗れるようになりました。「休みの日には家族でサイクリングが楽しみ」と、のんびりゆったりのイナカライフを楽しんでいます。

収穫間近の9月17日。琥太郎君は8歳の誕生日を迎えました。今年の誕生日の場は、生まれ育った苦小牧市ではなく、黄金色の稲穂が波打つ菅原家の農場。

ここから始まる親子3人妹背牛町での暮らし。見つめるその先には人生の新たなページが開かれ、喜びや悲しみが入り交じった家族の物語が綴られていきます。



創業当時、農場地区から馬そりで買い出しに来る人々で賑わつた新谷商店。

大正9年、新谷豊次郎氏が創業、町民の台所として親しまれている「フレッシュマーケットしんたに」。その4代目が新谷行弘さんです。

「高校卒業後、都会にあこがれて上京し、好きだった服飾関係の仕事につきました。それなりの収入もあって、都会暮らしはなかなか楽しかったですね」

しかし、次第に大都会の喧噪の中で人生を送ることに違和感を覚え9年後に帰郷。後継者となる決意をしました。

「妹背牛は東京に比べるに確かに過疎地ですが、逆に都会よりも人との距離が近く感じます。ここで暮らしてゆくうちに、やはりイナカが体質に合うのを自覚するようになった」



東京で身につけたソフトな接客は、お年寄りに好評。

まちの台所を担ってまもなく百年 笑顔とレトロな前掛けが似合う四代目

新谷 行弘さん



しんたに ゆきひろ
● 1979年妹背牛町生まれ。2005年帰郷し、両親と共に「フレッシュマーケットしんたに」の経営にあたる。「休日には札幌などで、1940年代のビンテージファッションを見て回るのが楽しみ」



この笑顔とレトロな前掛けが、行弘さんのベストスタイル。

帰郷後、商工会青年部や消防団にも加入。ここで業種を越えた人たちと交わり語り合う中から、数多くの事を学びました。

「社会・経済は絶えず人や物が循環し成り立つもの。そうした意味では自分のようなUターン人間も必要ではないのかな？人口が減ってゆくのは寂しいですが、だからこそまちの人たちにより近い商売をしていきたい」と明るく語る行弘さん。

品店となつてしまいました。しかし、車を持たない高齢者にとって、生活に欠かせない食料供給の役割は重要。いわゆる「買い物難民」が社会問題となる中、ここは大切なライフラインと言えます。

「胆振東部地震による長時間停電ではレジが全く機能しなくなりましたが、お客さんの自己申告で電卓を打ちながらなんとか切り抜けました」

これも永年にわたりまちに根付いて商売を続けてきた、信頼関係の上に成り立つこと。

「曾祖父の代から今日まで続けられたのは、地元の支えがあつてこそ。永年のご愛顧に感謝し、皆様のご恩に応えられるよう努力します」

土口くから「しんたにさん」とまぢの人々に親しまれてきたこの店は、まもなく創業百年。次の世紀を担う四代目に、いまだ大きな期待が寄せられています。

「Calm」という キャンパスに描く 美容師の夢

宝泉 翔也さん



「将来美容師になろうと決めたのは、中学校を卒業する頃かな」と語る宝泉翔也さん。美容師として働く母の傍で過ごすうちに、いつしか自分も美容の世界を意識し、やがてそれが現実のものとなりました。

高校卒業後、旭川市の美容学校で学び国家資格を得た後、旭川市や滝川市の美容室で腕を磨く修行の日々が続きま



ほうせん しょうや

●1992年妹背牛町生まれ。2014年より美容室「Free Style Calm」の店長。

「お客様と語らいながら、いっしょに美しさを創り上げていくこの時間がうれしい」



翔也さんが修業時代から使い続けているシザーケース。美容の七つ道具を納めた美容師の魂ともいえます。

店名の「Calm」は「穏やかな・静かな」という意味。まさに閑静な住宅街の奥まった小さな店舗のため、開店当初は見落として通り過ぎる人もいたとか。美和さんは、全く知名度のないこの店を知ってもらうため、知人に1軒ずつハガキで案内することから始め、手書きのポスターを掲示し、地道にPRを重ねてきました。

その後、インターネット上に店のホームページを開設。現在ではフェイスブックやライン、インスタグラムなど、時流をとらえたPR手法を取り入れ、顧客の層が大きく広がっています。



店内では親子というより仕事仲間。「移り変わりの激しい美容業界の中で、若いセンスを持つ息子から学ぶものが大きいです」と美和さん。

「かつてはイナカと言われた地域でも、インターネットが隅々まで普及し、どこにいてもファッション情報や新たな美容技術など、都会に在ると情報に大きな差はないですね。肝心なのは、自ら取り入れようとする姿勢。膨大な情報の中から大切なものを拾い上げるセンスかな。新しい技術を自分なりにアレンジして、ここから新しい風を吹かせるのが夢です」

小さなまちの小さな美容室「Calm」。そこにある真っ白なキャンパスには、未来に向けて美容師としての大きな夢が描かれていきます。



技能検定に向けた指導に真剣に耳を傾ける実習生

近年、東南アジアなどの発展途上国から、「外国人技能実習制度」を利用し、若い実習生を受け入れる企業が増えています。妹背牛町では60年以上にわたって鑄物機械部品製造を行っている佐藤鑄工株式会社^{※1}が、3年前からベトナムの実習生を受け入れています。

同国は長年にわたり戦禍に苦しんでいましたが、戦後の荒廃から立ち上がり、いま新たな国造りに取り組んでいます。

同社では、これまで延べ30名のベトナム人技能実習生を受け入れてきました。同社があえてベトナム人を選んだのは、かつて佐藤孝造社長がベトナムを視察した際に、非常に勤勉でまじめな国民性に共感したからです。現在、男性24名、女性4名の

グローバル化に対応

妹背牛町初の外国人技能実習制度導入



佐藤鑄工株式会社

技能実習生が、町内の4カ所の寮で共同生活をしながら、日々実習に励んでいます。

佐藤社長は、「ベトナムの技能実習生は、器用で向上心・向学心が旺盛。熱心に仕事に取り組み技術の吸収が早い」と高く評価。同社では、「安全確実な業務遂行には意思疎通が不可欠、さらに地域とのコミュニケーション能力の高い人材を育成しよう」と、毎月2回日本語教育の機会を設けています。さらに日本語能力検定の受験を推奨。取得段階に応じて佐藤社長がプレゼントを贈り、これも技能実習生の励みとなっています。



佐藤社長も率先して社員教育にあたります

この秋には第5期の技能実習生6名が新たに採用され、妹背牛町の住民となりました。彼らが暮らす1区20町内の寮では、さつそく寮生が町内会の人たちとのコミュ

実習制度とは

「労働者派遣法」に基づき、所定の試験と面接受け入れて実習を行うもの。先進国として日本の役を担うため、技能、技術又は知識を開発途上国等へことを目的としています。年間の実習を受けることができ、帰国後は日本で習得するものです。世界的にグローバル化が進む中、人種や国籍を越える社会が現実のものとなりつつあります。

ニヶーションを兼ねた環境整備に汗を流しました。作業後には、ちゃんこ鍋を囲んで昼食会。身振り手振りながらも、積極的に地域に溶け込もうとする若者たちの姿に、町内会の人たちもしだいに好感を抱き、相互の理解をはかる良い機会となりました。



町内会の人たちと寮周辺の環境整備

※1 東南アジアのインドシナ半島東部に位置する社会主義共和国。ASEAN 加盟国
首都 ハノイ 国土面積 31 千km² (日本の 88%) 人口 9,370 万人 (2017 年末) 言語 ベトナム語

日本の厳しい品質管理を学び

母国に貢献できる人材に

ホクレン包材株式会社

ホクレン包材株式会社は、昭和41年に妹背牛町でホクタイ株式会社第1工場が操業を開始、平成9年には現在の社名となり、主に各種包装資材・

営農資材などの製造を行っています。同社でも、佐藤鑄工の導入事例を参考に、昨年から外国人技能実習制度を導入しています。

同社の岩淵鉄夫工場長にこうした技能実習生の受け入れ状況と、今後に期待するものをお聞きしました。

「当工場では、平成29年度よりベトナム人の技能実習生を受け入れました。現在は7名で、男性2名はプラスチック成形に、女性5名が帆布の縫製作業に従事しています。技能実習生とはいえ、給与・労働条件は日本人と同一条件としています。当工場はかつて肥料袋の製造が主

でしたが、現在は食品包装の内袋なども手がけていることから、より厳格な食品安全管理が求められています。

ベトナム人の気質はまじめで仕事を覚えるのが早く、いったん教えたことは忘れない特質があります。時には仕事上のトラブルもありますが、状況をよく説明し、細かな点についても真剣に取り組む姿勢を教えています。こうした中から日本の厳しい品質管理レベルに追いつき、それ以上のものを吸収して、ここで得た技術を母国で役立ててもらいたいと願っています」



岩淵鉄夫工場長



ファム・バオ・クオックさん(左)
チャン・タット・タンさん(右)

技能実習生のファム・バオ・ク

オックさん(23歳)「日本はとても清潔な国で工業技術が進んでいることを知り、この国で研修することを望みました。この工場で働きだして9ヶ月。仕事は難しいところもありますが、日本人の職員に教えてもらいながら、少しずつ慣れてきました」

チャン・タット・タンさん(24歳)「実習期間中に日本語検定に合格できるよう勉強しています。母国の家族とはフェイスブックなどでいつも連絡を取り合っていますし、会社の皆さんにも仲良くしてもらい寂しさはありません」

「日常生活では、町内の寮に住み、日本の生活習慣や言語の壁も少しずつ克服してきました。休みの日になると自転車で近隣のスーパーに買い物にでかけ

たり、女性の技能実習生は寮の裏の畑でベトナム料理の食材にするための野菜を栽培するなど、母国から遠く離れた妹背牛町の生活を楽しんでいきます。

外国人技能

「外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生などの選考を経た外国人青年を、日本各地の企業が割を果たしつつ、国際社会との調和ある発展を図るの移転を図り、経済発展を担う人づくりに協力する技能実習生は定期的な試験に合格すると、最長5得した知識や技術を生かして母国の経済発展に貢急速に過疎化・少子高齢化が進む我が国。さらにて有能な若い人材を受け入れ、互いに協力し共存す



帆布袋の縫製作業(第1工場)